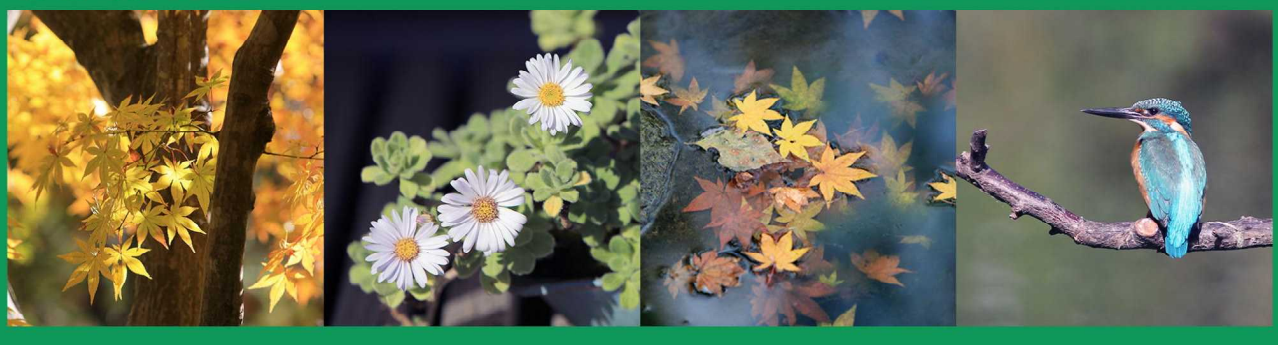
http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.294　13/11/26



アルジャーノンに花束を

●●さんが、「決選投票はアルジャーノンになりました」と報告してくれた。ただ、それもそれほど大きな差ではなかったということなので、アラジンを…と思っている人も多いのだろう。しかし、決まったものは決まったのであるから前向きに考えよう。

ちなみに、『アルジャーノンに花束を』（ダニエル・キース）は名作だから、ミュージカルのビデオを観るだけでなく、まだ読んでいない人は冬休み中に読書することを勧めたい。図書室にあるはずだし、昔は単行本しかなかったが、今は「ダニエル・キース文庫」というのがあって、安価で文庫本として読むことができる。さらに、当然ながら原作の英語版ペーパーバックを読んでもよい。書評によれば、そんなに難しい英語ではないらしいし、「原書で読む～」みたいな大学の講読用のテキストも売られているようだ。

＊

精神遅滞の青年チャーリイは、他人を疑うことを知らず、周囲に笑顔をふりまき、誰にでも親切であろうとする、大きな体に小さな子供の心を持ったおとなしい性格の青年だった。しかし彼には子供の頃、正常な知能の妹に性的な乱暴を働いたと家族に誤解され、母親に見捨てられた過去があった。

ある日、彼は仕事のかたわら通う精神遅滞者専門の学習クラスで、監督者である大学教授から、開発されたばかりの脳手術を受けるよう勧められる。先に動物実験で対象となったハツカネズミの「アルジャーノン」は、驚くべき記憶・思考力を発揮し、チャーリイと難関の迷路実験で対決し、彼に勝ってしまう。この手術の人間に対する臨床試験の被験者第1号として、彼が選ばれたのだった。

手術は成功し、チャーリイのIQは68から徐々に上昇。ついには185に達し、彼は超知能を持つ天才となった。チャーリイは大学で学生に混じって勉強することを許され、知識を得る喜び・難しい問題を考える楽しみを満たしていく。だがいっぽうで、頭が良くなるにつれ、これまで友達だと信じていた仕事仲間にだまされいじめられていたこと、母親に捨てられたことなど、知りたくもない事実の意味を理解するようになる。

一方、チャーリイの感情は未発達な幼児のままだった。突然に急成長を果たした天才的な知能とのバランスが取れず、妥協を知らないまま正義感を振り回し、自尊心が高まり、知らず知らず他人を見下すようになっていく。誰もが笑いを失い、周囲の人間が遠ざかっていく中で、チャーリイは手術前には抱いたことも無い孤独感を抱くのだった。また、忘れていた記憶の未整理な奔流がチャーリイを苦悩の日々へと追い込んでいく。

そんなある日、自分より先に脳手術を受け、彼が世話をしていたアルジャーノンに異変が起こる。チャーリイは自身でアルジャーノンの異変について調査を始め、手術に大きな欠陥があった事を突き止めてしまう…。

（Wikipediaより）

＊

原作では、悲しく静かな最後を迎えることになる。劇では、悲→喜→悲の大きな感情のうねりをうまく表現し、それをラストの感動に結びつけられるかがポイントだろうか。